藤澤南岳と篆刻芸術

吾　妻　重　二

FUJISAWA Nangaku and Seal Art

AZUMA Juji

HAKUEN collection of Kansai university includes seal collection amounts to 172 items. These seals were possession of FUJISAWA Nangaku, the famous leader of HAKUEN Academy in Osaka, and were all made by well-known artists between late Edo era, Meiji, and Taisho era. This paper will discuss about the relation of Nangaku and traditional arts such as painting, calligraphy, and seal art.

キーワード：泊園文庫、印章、印譜、円山大迂、阿部縑洲、羽倉可亭、蘭亭会

一　南岳と印章コレクション

藤澤南岳は江戸時代後期の天保十三年（一八四二）、著名な漢学者藤澤東畩（とうがい）の長子として生まれた。東畩は四国高松藩の儒官であったが、大坂居住を特別に認められて泊園塾を主宰し、荻生徂徠に始まる古文辞学を継承、展開していた。そのもとで教育を受けた南岳は卓越した才能を早くから発揮し、幕末の慶応元年（一八六五）、二十四歳で家督を継いで高松藩儒官になると、引き続き泊園塾を主宰し、同年早くも平野含翠堂に東畩に代わって出講するとともに、中国の故事集『自警蒙求』二巻を編纂、出版している。

これ以後の南岳の活躍は人も知るとおりである。幕府親藩であった高松藩の藩論を佐幕から勤皇へと劇的に転換させて同藩を滅亡の危機から救ったこと、明治新政府の出仕要請を断わり、明治六年（一八七三）、大阪に泊園書院を再興したこと、全国から学生が雲集して書院の黄金期を作ったこと、島田篁村による帝国大学漢学科第二講座教授就任の要請をあえて辞退したこと、六十種にのぼる著作を次々と刊行したこと、明治時代から大正時代にかけて日本を代表する漢学者として、また繁都大阪を代表する文化人として衆望を集めたことなどは改めていうまでもないであろう。大阪の通天閣は昨年（二〇一二）、設立百周年を迎えたが、このタワーに通天閣と命名したのは南岳その人であった。

南岳は大正九年（一九二〇）、七十九年にわたる生涯を閉じるが、泊園書院が長子の黄鵠（こうこく）、次子の黄坡（こうは）、黄坡義弟の石濱純太郎によって受け継がれ、学術、研究、教育、文芸などの方面において大きな影

響力を発揮したことは衆目の一致するところである。

さて、これらの印章は、昭和二十六年（一九五一）三月、泊園書院の二万数千冊にのぼる蔵書や膨大な自筆稿本とともに関西大学に「泊園文庫」として一括寄贈されたコレクションに含まれ、全部で百七十二顆ある。この中には東晜や黄鵠、黄坡、石濱純太郎の私印と思われるものが一つも含まれておらず、すべて南岳所蔵のものと思われる[1]。詳しくは近日出版予定の拙著『泊園文庫印譜集』（関西大学東西学術研究所、二〇一三年三月）を参照されたいが、いま、この篆刻コレクションを中心に、南岳と芸術書画の関係などについて論じてみたい。

二　南岳と書画の鑑賞

南岳は厳格な学者･教育者であるとともに、文芸に遊ぶ文人でもあった。「琴棋書画」という語があるが、これらは東洋の文化人＝君子が身につけるべき学芸として望まれていたものであった。南岳は、東晜が弾くことができた琴こそ弾かなかったが、常に囲碁を楽しみ、書家としても高名であり、また画幅を好んで鑑賞している。このような幅広い教養は、徂徠学の詩文芸術を嗜む学風を受け継ぐものといえよう。ガチガチの漢学者先生ではなく、芸術に理解をもつ高雅さにあふれた人物だったのである。

いま、南岳と書画芸術との関係について一瞥してみよう[2]。

たとえば大正二年（一九一三）三月、南岳は京都蘭亭会の発起人になっている。蘭亭会とは中国東晋の王羲之が永和九年の癸丑の年（三五三）、会稽の蘭亭（現在の浙江省紹興市）に名士を招いて曲水の宴を開き、詩会を催したことにちなむ会である。大正二年はちょうど癸丑の年にあたっており、書聖王羲之にちなんで書画の展示会が盛大に開催されたのであるが、これには富岡鉄斎、内藤湖南、鈴木虎雄、高谷桂堂、村山龍平、本山彦一、芝川又右衛門ら、文字どおり関西を代表する学者・書家・文化人・実業家が参画していた。南岳がその一人に名を連ねているというのは、その書画方面における名望がいかに高かったかを示すものである[3]。

蘭亭会に関しては、南岳に「蘭亭帖会」に関する記録がある。この蘭亭帖会は京都蘭亭会に先だつ明治四十二年（一九〇九）十二月二十一日に催されたもので、その時の南岳自筆の日記に次のようにある。

1）なお、泊園文庫にはこられの印章のほかに割れ印が少なからず伝わっているが、それらは印泥の跡を留めていないことから印章として使用されたことがないと判断される。

2）以下、南岳の自筆稿本を多く用い、関西大学総合図書館の整理番号をあわせ記す。LH２に始まるのがその番号である。なお、南岳の日記に関しては、吾妻重二編『関西大学泊園文庫 自筆稿本目録稿（甲部）』（関西大学アジア文化研究センター、二〇一二年）を参照されたい。

3）京都蘭亭会については、内藤湖南「蘭亭会縁起及章程」（『内藤湖南全集』第六巻、筑摩書房、一九七二年）、および神田喜一郎「大正癸丑の蘭亭会」（『神田喜一郎全集』第九巻、同朋舎出版、一九八四年）参照。なお南岳は、大正二年四月十二日・十三日の両日にわたり京都府立図書館で開かれた京都蘭亭会そのものには都合により出席できなかった。そのことは南岳の詩「鳴鶴素軒諸老有蘭亭修禊記念会之挙、見招、有故不得往、賦之以寄」に詠われている（『七香斎吟草』第四冊、LH２＊甲＊111＊４）。なお、発起人の一人である大阪毎日新聞社社長本山彦一の収集した考古資料は現在「本山コレクション」として関西大学博物館に収蔵され、平成二十三年度（二〇一一）、美術工芸品考古資料の部の登録有形文化財に登録されている。

原文は漢文なので、あとに現代語訳を掲げることにする。

二十一日小雨後晴。高谷、小川、芝川設蘭亭帖会于堺卯楼、被招、未牌往会焉。会者二十五六名、内藤等十人則至自京都、蘭亭凡百餘刻、佩文書画譜以至米菴墨談所載昭ニ。此会僅五十一本而刻則神龍定武居其半。観畢而宴。湖南為会衆談帖典故、亦頗詳密[4]。（句読点は引用者による。以下、同じ）

（二十一日、小雨のち晴れ。高谷、小川、芝川が堺卯楼で蘭亭帖会を開くので招かれ、未の刻に会に出かけた。集まった者二十五、六名、内藤ら十人は京都からやって来た。蘭亭帖の模刻拓本がおよそ百余刻あることは「佩文斎書画譜」、さらには「米菴墨談」にはっきり載っている。この会ではわずか五十一本のみを展示し、模刻は神龍本と定武本がその半ばを占めている。閲覧が終わって宴会となった。湖南は参加者のために蘭亭帖の典故について話したが、これまた詳細精密なものであった。）

ここにいう「佩文書画譜」とは清の康熙帝勅撰の書画文献集成『佩文斎書画譜』のこと、「米菴墨談」とは江戸時代後期の書家・漢詩人、市河米庵による書法論『米庵墨談』のことであり、また「神龍定武」は王羲之の蘭亭序の模刻拓本の版本をいう。書法に関する南岳の造詣の深さが知られるというものであるが、さらに注目したいのは、この会に京都から参加した内藤湖南が蘭亭帖に関して詳細な説明を行ない、南岳がそれを興味津津として聴いていることである。南岳は湖南とはあまり親しいつき合いはなかったようだが（湖南と最も親しかったのは石濱純太郎である）、南岳が残した「六家選」と題するメモには「文章家仙」、すなわちすぐれた文章家として「近藤南州、西村天囚、籾山衣洲、内藤湖南、藤澤黄鵠」の五名を挙げており、湖南の実力を高く評価していた[5]。

このほか、印章四三―一、四三―二は側款に蘭亭序冒頭の文を刻んだ佳作であり、南岳の王羲之に対する傾倒を物語っている。

そもそも、南岳は関西を中心に多くの文人墨客と交際していた。そのことは彼の残した日記をひもとけばただちに知られるのであって、「保古会」や「徴古会」など同好の士による書画・古典籍の展示会や[6]、詩社「逍遥遊社」「先春吟社」を通じての展観、品賞などがおびただしく記されている。また古書や善本、書画、古器、印章鑑賞のため、大阪のほか京都、奈良、神戸などへ友人や寺院をたびたび訪ね、さらに明治八年（一八七五）に設立された「大阪博物場」（現在の大阪市中央区本町）にも足繁く通い、古画、古器物、刀剣、墨拓、古印その他の展示を鑑賞し、時に鋭い品評を下している。いま、そうした例を少し挙げてみよう。

明治四十年（一九〇七）二月二十六日の南岳日記に次のようにある。

二十六日晴、観鵝会已近矣。到博物場閲諸家所寄名幅、村山龍、上野理、芝川又、高谷桂堂、加島菱洲皆在焉、乃共評諸幅。ニ皆三百年来名賢遺墨、閲来如接其人、而一二不能不容疑者、議而排之、

4)『七香斎日程』庚部第四冊（LH２＊甲＊218＊４）。

5)『七香斎雑纂』第二冊、南岳自筆稿本（LH２＊甲＊133＊２）。

6) 保古会と徴古会については、水田紀久「南岳先生『不苟書室日録鈔』を読む」（『近世日本漢文学史論考』、汲古書院、一九八七年）に詳しい考察がある。

遂使山中梛川門内諸氏陳諸美術館中、薄暮会散[7]。

（二十六日晴れ。観鵝会ももうすぐである。博物場に行って諸家の持ち寄った書画の名品を閲覧した。村山龍平、上野理一、芝川又右衛門、高谷桂堂、加島菱洲がみな来ており、さっそく諸幅を品評しあった。諸幅はみな三百年来の名賢の遺墨であり、見ているとその人とじかに接しているような心持ちになる。ただ一、二については疑いを払拭しきれなかったので、議論してこれを取り除いたうえで、山中梛川門の諸氏に美術館内に展示させた。夕暮れ時に散会となった。）

ここにいう「観鵝会」とは、鵞鳥を可愛がった王羲之にちなむ名らしく、一種の書画鑑賞会のことらしいが（後述）、興味深いのはここに登場する人々である。「村山龍」は村山龍平で大阪朝日新聞社社長、「上野理」は上野理一のことで、村山とともに朝日新聞の経営にあたり、古書画収集にもつとめていた。「芝川又」は芝川又右衛門のことで、大阪船場の豪商であり文人としても知られていた。西宮に果樹園「甲東園」を拓き、明治四十四年（一九一一）にその地に建てた勇壮な西洋式別荘が現在、愛知県犬山市の「博物館明治村」に移設されているのは有名である。高谷桂堂は大阪の弁護士で法曹界の重鎮だが、茶人としても活躍し、書画の鑑識眼にもすぐれていたという[8]。加島菱洲は名を信成といい、南岳友人で、印章八〇の篆刻者でもある。このうち村山、上野、芝川、高谷はのちに、上記蘭亭会の発起人に名を連ねた人物でもあり、まことに錚々たる顔ぶれというべきであるが、さらに面白いのは博物場で多数の画幅を見て感嘆した南岳が、そのうちの一、二の作品の真偽につき疑義を呈していることである。

これには後日談がある。翌日の日記に次のようにあるからである。

二十七日晴、午前高谷上野致書、且以車来迎、乃到春海氏、二子在焉。主人供抹茶、及午餐、芝得斎、加菱洲皆来、遂共走車入博物場、上野、山中、田村亦会、有所議、こ得其宜、不致破裂。蓋前日来所評論稍過、直将苛酷有憂之者、況以骨董為業者、恐致失其信、堕声価、其情可憫。然而吾曹鑑識、豈可枉以阿乎。事こ得中、亦艱哉。要之、鑑識抜萃以使昔人瞑目于地下、則能事畢也。且観鵝為会、在奨励書道、而鑑別昔賢遺墨則非旨趣所在也。故相譲以不致破裂也已。申牌、散去。

（二十七日晴れ。午前、高谷と上野から手紙があり、しかも迎えの車が来たので春海氏のところに行くと、高谷と上野の二人が来ていた。主人は抹茶を出してくれ、昼食時には芝得斎と加島菱洲もみな来たので、そのまま車を走らせて博物場に入った。上野、山中、田村も集まって議論した結果、合意を得て、決裂するには至らなかった。そもそも昨日来の評論はやや行き過ぎており、辛辣苛刻だとしてこれを憂うる者がいたのである。まして骨董業者は信用を失い、評価を落とすのを恐れていて、その心情たるや憐れむべきである。しかし、どうして我々の鑑識を曲げて阿諛追従できようか。事ごとに中正を得るのは難しいことといわざるをえない。要は、ずば抜けて優れた作品を鑑識し、今は亡き古人を安んじて瞑目させうるならば、それでよしとしなければならぬ。しかも観鵝の会を作ったのは書道を奨励するためであって、昔の賢人の遺墨を鑑別するのはその趣旨とするところではない。よって互いに譲りあい、決裂するに至らなかったまでである。申の刻に散会した。）

7)『七香斎日録』乙部（LH2＊甲＊213＊1）。

8) 以上の上野、芝川、高谷については三善貞司編『大阪人物辞典』（清文堂、二〇〇〇年）が詳しい。

ここにいう「芝得斎」とは上述した芝川又右衛門のことである。上野や高谷、芝川らは南岳が疑義を呈したのに慌てたのであろう、翌日改めて南岳を迎えにやり、書画の真偽について意見を求めたのである。この記録を見ると、議論の結果、双方妥協したようであるが、この一件は南岳のすぐれた鑑識眼と批評が、当代一流の文人にとって端倪すべからざるものであったことをよく示している。

もう一つ、南岳は明治四十二年（一九〇九）、京都における敦煌遺書の展示会に出向いている。その十一月二十九日の日記にこうある。

二十九日晴、之京都観燉煌所掘唐代遺書撮影及古刻孝経等於図書館。ニ在岡崎太極殿西 所観諸書有別録、故省略。……申牌走七條搭汽車、戌牌帰[9]。

（二十九日晴れ。京都に出かけ、燉煌から発掘された唐代の遺書の写真と『孝経』の古刊本を図書館で閲覧する。図書館は岡崎の太極殿西にある 閲覧した諸書については別に記録を記したので、ここでは省略する。……申の刻に七条まで走って汽車に乗り、戌の刻に帰宅した。）

ここに記される敦煌遺書の展示こそは、日本における敦煌学の始まりを告げるものであった。そもそも敦煌文書の発見が日本に初めて伝えられたのはこの年の九月のことであり、同年十一月二十四日から二十七日まで、四日間にわたって内藤湖南が『朝日新聞』にその解説を掲載している。ついで十一月二十八、二十九日の両日、ここに記されるように、新築なった京都の府立図書館でその写真版が展示されたのである[10]。敦煌文書は学術的にはもちろん、美術的にも高い価値をもっており、南岳は新発見の古典籍についても並々ならぬ興味をもっていたのである。

このほか南岳が画帖、画巻、書幅に多くの序跋を書いていることも挙げることができる。ここでは紹介を省くが、彼の自筆稿本の中にそれを見ることができる。

三　南岳と印章・印譜

1　南岳と印章

さて、南岳は印章についても深い関心をもっていた。南岳は「文房清玩、印譜為重」（文房清玩は、印譜を重しと為す）と、文房諸品のうちでも印譜のもつ重要さを語っている（多治見久太郎編『定武楼印槀』南岳序、後述）。

南岳は印章について知友や篆刻者とたびたび語り合っている。日記からいくらか例を挙げてみよう。

明治十三年（一八八〇）十一月十七日には陳曼寿に対し、

所煩印章刻成否。成則幸附[11]。

（お願いした印章はできたでしょうか。できたならお送りください。）

と書き送っている。陳曼寿は名を鴻誥といい、浙江省秀水の人で、当時、清末の混乱を避けて大阪に寄寓しており、この頃の南岳日記にたびたび登場する。彼は書法や篆刻に巧みで、愈樾の『東瀛詩選』に

9)『七香斎日程』庚部第四冊（LH２＊甲＊218＊４）。

10) 神田喜一郎「敦煌学五十年」（『神田喜一郎全集』第九巻、同朋舎出版、一九八四年）。

11)『不苟書室日録』甲部第一〇冊（LH２＊甲＊206＊10）。

先だって中国人による最初の日本人漢詩集『日本同人詩選』を編んだ人物として知られ、同書には南岳が序文を書いている[12]。後にとりあげる原田西疇『読僊書堂印譜』に題署したのも陳曼寿である。

明治十四年（一八八一）五月八日の日記には、

八日晴、得菴会棋友于其寓居、余亦与焉。……余倦于棋、請得菴印閲之、材皆佳、子母印其所最愛重。大小二十顆、曰古二千石、曰滄江迂士、曰慧業文人、曰吾亦愛吾非、曰桃李不言、曰氷心在玉壺、曰乙丑進士、曰煙霞骨相、皆絶佳、但不審誰氏所刻、要之、不下康熙年間。

（八日晴れ、得菴が囲碁友達をその寓居に集め、私にも声がかかった。……私は囲碁に飽きたので、得菴に頼んで印章を見せてもらった。印材はみな立派なもので、子母印〔入り子式に分かれるようになった印章〕は彼の最も愛重するところであった。大小二十顆あり、曰く「古二千石」、曰く「滄江迂士」、曰く「慧業文人」、曰く「吾亦愛吾非」、曰く「桃李不言」、曰く「氷心在玉壺」、曰く「乙丑進士」、曰く「煙霞骨相」、すべて絶品であるが、誰が刻したのかは未詳である。要するに康熙年間を降らないであろう。）

とある。ここにいう得菴とは鳥尾得庵（小弥太、一八四八―一九〇五）のことである[13]。長州萩藩士で元老院議官、陸軍中将、枢密院顧問官、子爵になった人物で、『得庵全書』（一九一一年）、『得庵全集続編並年譜』（一九三四年）の著書があり、『得庵全書』の序文は南岳が書いている。この日記から南岳がその多数蔵する古印に興味を引きつけられていることがわかる。

明治十七年（一八八四）七月七日の日記には、

課餘展印譜観之、篆法奇俊、語亦清爽、抜萃之美可喜[14]。

（課業の余暇に印譜を開いてみた。篆刻の法は奇抜で、刻された語も清爽である。すぐれた作品の美しさはまことに喜ばしい。）

とあり、印譜の美しさを楽しんでいる。ここにいう「印譜」は前日の日記によれば『水月斎印譜』のことで、東本願寺第二十一代法主の大谷光勝（一八一七―一八九四）の鑑蔵で、梨堂相公（三条実美）の題字ならびに自序をもつという[15]。

また、明治二十八年（一八九五）二月二十七日の日記には、

二十七日晴、中村石農来、石農高松人、善篆、作余大印、面背共美、其大三寸、非尋常刀所能辨也[16]。

（二十七日晴れ、中村石農が来た。石農は高松の人で篆刻を善くし、私のために大きな印章を作ってくれた。正面・背面いずれも美しく、大きさは三寸。尋常の刀法のよく作りうるところではない。）

---

12)「日本同人詩選序」は南岳の『七香斎文稿』（泊園書院、一九一四年）に掲載されている。陳曼寿については、蔡毅「陳曼寿と日本同人詩選」（『国語国文』七二―三、京都大学、二〇〇三年）が考察している。また『日本同人詩選』は現在、王宝平主編『中日詩文交流集』（上海古籍出版社、二〇〇四年）に影印収録されている。

13) 南岳自筆稿本『芸窓餘事』（LH２＊甲＊71）の「別号録」に「得庵鳥尾」とある。

14)『不苟書室日録』乙部第七冊（LH２＊甲＊207＊８）。

15)『水月斎印譜』については、中田勇次郎編『日本の篆刻』（二玄社、一九六六年）二六〇頁上段参照。

16)『七香斎日録』戊部第一冊（LH２＊甲＊210＊１）。

とある。中村石農は南岳と同郷の四国讃岐の人であり、この時、来阪して南岳を訪ねたのであろう。中村は印章二九の作者であり、『福禄寿印譜』（一九〇二年、後述）も残している。『福禄寿印譜』には三島中洲とともに、南岳が序文を書いている。

明治三十三年（一九〇〇）十月二十六日の日記には、

三浦香圃、高森鶴舟来、共善印篆。乃出五三郷君印譜、咲談特余韵事風流、亦人世所難持[17]。

（三浦香圃と高森鶴舟が来た。いずれも篆刻の名手である。五三郷君の印譜を出してきたので、談笑してことのほか風雅な気分にあふれた。俗世ではまことに得たがいことである。）

とあり、印篆・印譜について語りあっている。三浦香圃は印章六九、九三、九七、一〇六、一一一の作者である。また「五三郷君」とは南岳門人で大蔵官僚として活躍し、その功により男爵となった郷純造のことで（五三はその別名）、篆刻の収集家としても知られ、本邦における漢印の最初の収集家であった[18]。ここにいう印譜とはあとに紹介する『随意荘印謄』か『法眼居印賞』のことであろう。

同年十二月二十六日の日記には、

銕耕菱洲来、方共話古篆事。楽水、晩翠、吉田、稲田諸子相次来訪、遂共弄棋、申牌客散[19]。

（銕耕と菱洲が来て、やっと古篆刻のことについて語りあった。楽水、晩翠、吉田、稲田らが相い継いで来訪したので、一緒に碁を打った。申の刻に客は帰宅した。）

とある。銕耕は古川銕畊のことで印章五および三六の作者であり、菱洲は上にも触れた加島菱洲である。そのあと門生知友が大勢やってきて碁を楽しんだというのは、泊園書院におけるにぎやかな談論を彷彿とさせる。印章を含め、書画芸術についてさまざまに議論したのであろう。

明治三十六年（一九〇三）三月二日の日記を見ると、

二日晴……菱洲来謀印篆字面也[20]。

（二日晴れ……菱洲が来て篆刻の文字について相談した。）

と、加島菱洲と印章について議論している。

同年七月五日の日記には、

五日雨……午後雨歇、走車会先春吟友于蔵鷺菴。中島一瓢、円山大迂、吉田恒堂、篠田栗夫与元章及石仙立夫皆在焉。而柳江為会幹、吟興大盛、乃作大幅、快酔快話[21]。

（五日雨……午後、雨がやみ、車を走らせ蔵鷺菴で先春吟社の人々と会を開いた。中島一瓢、円山大迂、吉田恒堂、篠田栗夫、さらに元〔黄鵠〕と章〔黄坡〕および石仙立夫がみな来た。柳江が会の幹事をつとめ、詩作が大いに盛り上がったので、大きな書幅を作った。快く酔い、快く話した。）

とある。いま円山大迂作の印章一四を見ると、その側款に、

---

17)『七香斎日録』己部第一冊（LH２＊甲＊211＊１）。

18) 郷純造については、吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成１』（関西大学東西学術研究所資料叢刊二九—一、関西大学出版部、二〇一〇年）三六七頁を参照。その漢印収集に関してはあとに述べる。

19)『七香斎日録』己部第二冊（LH２＊甲＊211＊２）。

20)『七香斎日録』己部第七冊（LH２＊甲＊211＊７）。

21)『七香斎日録』己部第七冊（LH２＊甲＊211＊８）。

癸卯初夏、小集于藏鷺庵、賭酒鑒詩時、南岳先生有此屬刊、作之、乞正　老迂

（癸卯初夏、蔵鷺庵に小集し、賭酒鑒詩せる時、南岳先生に此の属有り、之を刊作す。乞う正さんことを。老迂）

とあるのが注意される。「癸卯」とは明治三十六年であり、おそらくこの日記に記された詩会において円山は南岳から委嘱され、この印章を作ったものと思われる。円山は明治期の日本を代表する篆刻家として著名であるが[22]、逍遥遊社の幹事をつとめたことのある漢詩人でもあり、南岳と碁を楽しむこともあり、互いに親しい間柄にあった[23]。「蔵鷺庵」とは上本町近くにある曹洞宗の古刹（現大阪市天王寺区上之宮町）であろう。

なお、印章一は明治三十五年（一九〇二）十二月の作だが、これも直前の十一月三十日に高津神社で開かれた詩会にちなむものかもしれない[24]。

また、明治四十四年（一九一一）九月三日の日記には次のようにある。

三日晴、訪米田十竹斎、得凍石印二顆、其鈕刻五岳、印奇而可玩。訪芝川得斎、不遇。訪南静山、観獅爪銅印等、坐談遣興[25]。

（三日晴れ、米田十竹斎を訪ねて凍石印二顆を得た。その鈕には五岳が刻され、印章は奇抜で珍重すべきである。芝川得斎を訪ねたが会えなかった。南静山を訪ねて、獅爪銅印などを見ながら座談して気を晴らした。）

ここにいう「凍石印」とは臘石で造られた印のことで、鈕には中国の五岳が刻まれていたという。この時南岳が得たという二顆は残念ながら伝わっていないようであるが、日記はその後、芝川得斎（芝川又右衛門）を訪ねたが会えず、ついで南静山を訪ねて銅印などを見ながら話しあったと伝えている。南静山は印章二二一一、二二一二、二二一三、七九の作者である。

以上、南岳日記から印章にかかわる記事をいくつかとり上げてみたが、他にも同様の話題はおびただしく記されている。南岳は青年時代から印章の美しさに惹かれ、これを研究し、収集にもつとめていたことがわかるのである。

2　南岳と印譜

南岳はさまざまな印譜に序跋を書いている。次に挙げるものがそれで、現在、いずれも泊園文庫に蔵されている。

原田西疇『読僊書堂印譜』二集一巻・一冊　明治十五年（一八八二）[26]

22）円山大迂については、『書道全集』別巻Ⅱ・印譜・日本（平凡社、一九六八年）一一七頁を参照。

23）『七香斎日録』己部第九冊（LH２＊甲＊211＊９）明治三十六年十二月二十一日の日記に「二十一日晴、訪石橋氏、大迂先在焉、遂至其家、閑棋両三局」、『七香斎日録』乙部（LH２＊甲＊213＊１）明治四十年二月の日記に「二十四日晴暖、会逍遥遊社友于寒山寺、円山大迂為月幹」とある。寒山寺とは大阪箕面の寒山寺であろう。

24）『七香斎日録』己部第七冊（LH２＊甲＊211＊７）。

25）『七香斎日程』庚部第七冊（LH２＊甲＊218＊７）。

26）南岳の『不苟斎日録』甲部第六冊の明治十一年八月十四日の条（LH２＊甲＊206＊６）、および『七香斎文叢』第一冊（LH２＊甲＊22＊-１）その他に「読仙書居印譜序」が載っている。

小山雲泉『千字文百顆印譜』一巻・四冊　明治十九年（一八八六）

南静山『山壽堂印譜』一巻・一冊　明治二十四年（一八九一）

郷純造編『法眼居印賞』三巻巻首一巻・四冊　明治三十一年（一八九八）

中村石農（名は正美）『福禄寿印譜』一巻・四冊　明治三十五年（一九〇二）

古川銕畊『水僊書屋印艸』第一集三巻・三冊　明治三十六年（一九〇四）

多治見久太郎編『定武楼印彙』一巻・一冊　明治四十二年（一九〇九）

これらの印譜の編者はおおむねみな南岳の知友である。原田西疇、南静山、郷純造、中村石農、古川銕畊についてはすでに触れたところである。原田西疇は南岳の親友であり、印章六の作者でもある。なお、泊園文庫には蔵されていないが、郷純造には『松石山房印譜』六巻（一八九四年）の編著もあり、南岳の序文「松石山房印譜序」が『七香斎文稿』第一冊（LH２＊甲125＊１）に載っている。この『松石山房印譜』こそは秦漢以来の古印を収集した最も早い印譜であり、日本篆刻学史上、特筆されるものである[27]。

いま、これらの序跋のうち二つほど紹介してみよう。南静山『山壽堂印譜』の南岳序文は次のとおりである。

石則寿、文字則寿、併之以致千歳、此印篆家之常、而非善之者不能。余於静山南君、知能保其寿也。君西備人、善篆、刀法純正、韻致秀潤、尤長水晶印、且善作漆器、用漆極妙、来寓浪華三年、人推称之。余謂、浪華文士墨客、頼君篆以不朽其書画、是君能保其寿、又保人之寿、可謂仁之方耳。乃書之以為其山寿堂印譜序。

明治辛卯孟秋　南岳藤澤恒

（石は則ち寿（いのちなが）く、文字は則ち寿し。之を併せて以て千歳を致す、此れ印篆家の常なるも、之を善くする者に非ざれば能わず。余、静山南君に於て、能く其の寿を保つを知るなり。君は西備の人、篆を善くし、刀法純正、韻致秀潤にして、尤も水晶印に長ず。且つ善く漆器を作り、漆を用いること極めて妙なり。浪華に来寓すること三年、人之を推称す。余謂（い）えらく、浪華の文士墨客は、君の篆を頼りて以て其の書画を不朽にす。是れ君能く其の寿を保ち、又た人の寿を保つ。仁の方と謂うべきのみ。乃ち之を書して以て其の山寿堂印譜の序と為す。）

ここには篆刻によって書画も不朽の価値をもつようになること、南静山の篆刻した印章が「刀法純正、韻致秀潤」であることが巧みに語られている。

また、この南岳序文の後には羽倉可亭による「恆印」「醒狂子」の印（印章二四―一、二四―二）が押されているので、図１にその部分を掲げておくことにする[28]。

次に、多治見久太郎編『定武楼印彙』の南岳序は次のとおりである。

風流韵事之重、与凡俗之軽、人〻知之。而不能従其重者、滔滔哉。北山七僧、浪華韵士、所交多名

27）『松石山房印譜』については、中田勇次郎「日本印章概説」（『書道全集』別巻Ⅱ・印譜・日本、平凡社、一九六八年）一八頁、同「日本篆刻史」（『日本の篆刻』二玄社、一九六六年）一四五頁を参照。

28）羽倉可亭の篆刻については、『書道全集』別巻Ⅱ・印譜・日本（平凡社、一九六八年）一〇七頁を参照されたい。また同書所収の中田勇次郎「日本印章概説」（一七頁）、および「日本篆刻史」（『日本の篆刻』二玄社、一九六六年）一四一頁にも羽倉の篆刻が特筆されている。

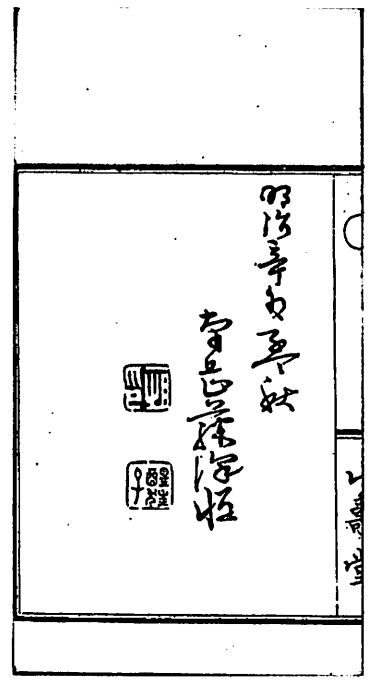

図1 『山蓊堂印譜』南岳序の末尾

士、幸有定武楼印累存、所篆人名亦具矣。平野郷多治見氏得而蔵之者久。頃日、春谷君欲刻以頒同好諸友、問叙于余。ニ謂、文房清玩、印譜為重、実如柳大夫之語、而君世嗜風雅、作此冊以助好韵事者之清玩、固美矣、亦凡俗鍼砭哉。

明治戊申春分節後五日　南岳恒識

（風流韵事の重きと、凡俗の軽きとは、人ニ之を知る。而して其の重きに従う能わざる者、滔滔たるかな。北山七僧は浪華の韵士にして、交わる所名士多く、幸いに定武楼印累の存する有り。篆する所の人名も亦た具（つぶ）さなり。平野郷の多治見氏、得て之を蔵すること久し。頃日、春谷君、刻して以て同好諸友に頒（わか）たんと欲して、叙を余に問う。余謂う、文房清玩は、印譜を重しと為すこと、実に柳大夫の語の如し。而して君、世ニ風雅を嗜み、此の冊を作りて以て韵事を好む者の清玩を助くること、固より美なり。亦た凡俗の鍼砭なるかな。）

ここにいう北山七僧（一七二一――一八〇六）は、大坂河内の人。服部南郭や柳沢淇園に学び、淀川の過書船の役人をつとめ、晩年には医業を営んだ。『定武楼印彙』の跋文によると、同書に収める印章はすべて七僧の従弟の漢詩人北山橘庵（一七三一――一七九一）から多治見春谷に贈られたものという[29]。つまり『定武楼印彙』は七僧と橘庵が所持していた印章の印譜集なのであろう。

なお、この南岳序文のあとには「恒字君成」「七香斎主人」の印が押されており（印章二二――、二二―二）、また富岡鉄斎が同書の題署を書いていて注目される。南岳序の冒頭とあわせて図2にかかげておく。

ところで、印譜集の跋文は南岳の父の東畝にもあり、『東畝先生文集』巻九に「書良山堂印譜後」を載

29)『七香斎日程』庚部第二冊の「書定武楼印譜後代多治見春谷」（LH2＊甲＊218＊2）参照。

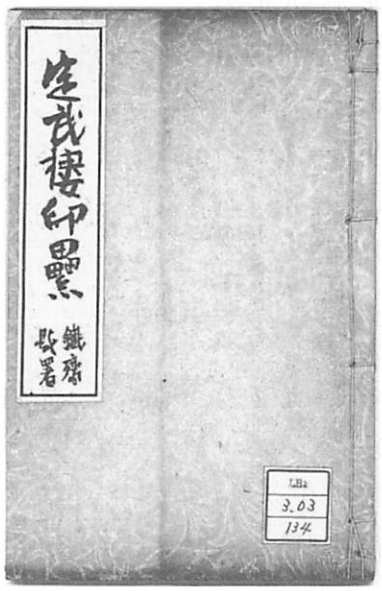

図２－１　『定武樓印譜』富岡鉄斎題署

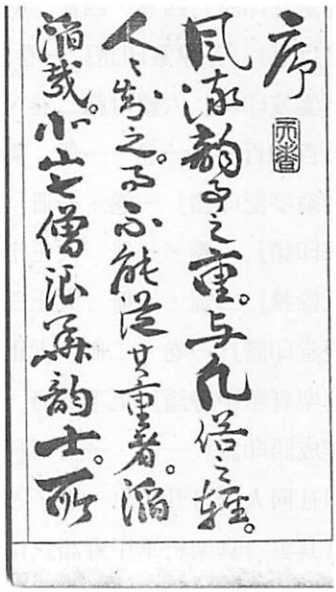

図２－２　『定武樓印譜』南岳序の冒頭

図２－３　『定武樓印譜』南岳序の末尾

せている。これは印章一五と一〇二の作者、阿部縑洲の印譜集のために書いた跋文である[30]。阿部は東畯と同じ讃岐出身の漢学者で、江戸時代後期、大坂で活躍し、東畯の親友であるともに南岳の庇護者であった。篆刻についても技能を発揮したすぐれた文人でもあり、南岳はその死去にあたって「祭縑洲先生文」を書き、交際を懐かしんでいる[31]。

30）阿部縑洲の篆刻については『書道全集』別巻Ⅱ・印譜・日本（平凡社、一九六八年）九九頁を参照。

31）「祭縑洲先生文」は、南岳の自筆稿本『七香斎文叢』（LH２＊甲＊21）および『詩文稿』（LH２＊甲＊112＊３）に

泊園文庫には他の印譜集も蔵されているので、ここに紹介しておくことにする。

郷純造編『随意荘印謄』四巻・四冊　明治二十四年（一八九一）

篠田芥津（名は悳）『芥津篆印譜』一巻・六冊　明治三十四年（一九〇一）

木邨鉄畊編『雲笈印範』六輯附録二巻・八冊　明治三十五年（一九〇二）

松浦武四郎『百印百詩』一巻・一冊　明治四十四年（一九一一）

河西笛洲『酔翁亭記印譜』一巻・一冊（刊行年未詳）

同　『帰去来印譜』一巻・一冊　大正十三年（一九二四）

行悳貫『風人餘埶』二篇・二冊　大正三年（一九一四）

山田鈍『古硯堂印譜』一巻・二冊　大正四年（一九一五）

雨宮其雲『真楽軒華甲寿譜』上下二冊　大正十二年（一九二三）黄鵠序文、黄坡跋文

逸名『自勝楼成語印譜』一巻・一冊（刊行年未詳）

大阪印界時報社同人『日升集』一巻・三冊　昭和三年（一九二八年）

このうち、雨宮其雲『真楽軒華甲寿譜』は南岳死去後の刊行であるため、黄鵠が序文を、黄坡が跋文を書いている。

ここで、南岳所蔵印章の印譜が一部、かつて公開されていたことについて紹介しておきたい。右に挙げた木邨鉄畊編『雲笈印範』第四輯に南岳所蔵の印影十四点を載せているのである。木邨鉄畊は長州三田尻の人で篆刻の収集家として知られ、南岳日記を見ると、『雲笈印範』の出版に先だつ明治三十五年（一九〇二）一月十三日に、

十三日晴、木村銕畊来。銕畊善篆、三田尻西僻之人[32]。

（十三日晴れ、木村銕畊が来る。銕畊は篆刻にすぐれ、三田尻という西国の人である）

とあることが注意される。ここで木村が南岳を訪ねてたのはおそらく印影掲載の準備のためであったかと思われる。『雲笈印範』は六輯附録二巻、全八冊からなる大部な印譜集であり、冒頭の「発凡」によれば、木邨は世に出回っている印譜が信を置けないのに対して一念発起し、明治二十二年から国内の諸名士をあまねく訪ね、その印章を本人から直接借りてみずから捺印し本印譜を成したという。『雲笈印範』にはおよそ百人、全三千余顆の印影が掲載されており、また各人物の肖像まで載っていて、きわめて貴重である。明治期を代表する総合印譜集といえようが、ここに南岳所持の印章の印影が載せられているのである。参考までに、そこに載せる印影をすべて掲げておく（図3）。

これらの印章のほとんどは現在、泊園文庫に蔵されているが、第三葉左上の「七香斎」印だけはなぜか本文庫に所蔵されていない。

これとは別に、この頃南岳の印譜を作るという話もあったようで、明治三十五年八月六日、門人の林秋圃、辻秋叢、日下一堂が南岳の印譜を作るために捺印している[33]。現在、泊園文庫自筆稿本（LH2＊

収められる。

32)『七香斎日録』己部第四冊（LH2＊甲＊211＊4）。

33)『七香斎日録』己部第六冊に「六日晴、秋圃、秋叢、一堂請作余印譜、巳牌来捺之」とある（LH2＊甲＊211＊6）。秋圃、秋叢、一堂がいずれも泊園門生であることは南岳自筆稿本『芸窓餘事』（LH2＊甲＊71）「別号録」の「門生」の項に「秋圃林」「一堂日下」、「秋叢辻」とあることからわかる。

図３－１　『雲笈印範』所載の南岳印譜（第１葉）

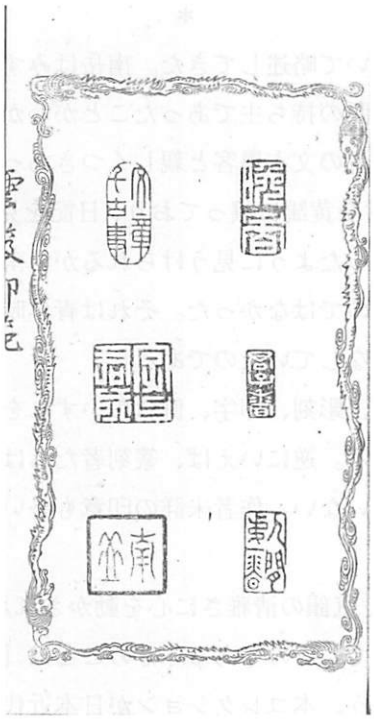

図３－２　『雲笈印範』所載の南岳印譜（第２葉）

図３－３　『雲笈印範』所載の南岳印譜（第３葉）

丙＊87）に『七香斎印譜』があり、十三顆の印影を載せているが、あるいはこの時に作られたものかもしれない。

3　南岳の姓名印と遊印

さて、泊園文庫の印章には、南岳の姓名や字、号を刻した姓名印が最も多い。南岳の名である「恆」のほか、字の「君成」も多い。青年時代の字である「盤橋」も一例ある（八四）。さらに号としては「南岳」が多く、「南嶽」も一例（一三）あるほか、「七香斎」、「香翁」、「九九山人」、「探酉洞人」、「仙陵野老」、「醒狂子」、「橘中仙」、「施生山人」、「黙僊」「泊園主人」などが刻されている。これらはすべて南岳の号であり、そのことについては『七香斎吟草』にある次の自筆メモが参考になる。

七香斎　探酉洞人　橘中仙

文教真君　遜動久中通亨仙史　黙仙

香翁　仙陵野老　施生山人[34]

これらのうち現在の印章に用例がないのは「文教真君」だけであり、「遜動久中通亨仙史」といういっぷう変わった号も印章八二に「遜動久中亨通仙史」と、「通亨」が「亨通」となって刻まれている。

このほか、詩句や成語を刻んだ、いわゆる遊印（関防印）も少なくなく、文芸の世界をいっそう際立たせるものとなっている。

34）『七香斎吟草』第八冊（LH２＊甲＊113＊８）。

*

以上、南岳と芸術および印章について略述してきた。南岳はみずから篆刻はしなかったが、古美術全般に関する深い理解とすぐれた鑑識眼の持ち主であったことがわかるであろう。書画、篆刻関係者との交遊も幅広く、関西を中心に当代一流の文人墨客と親しくつきあっていた。南岳は明治三十五年（一九〇二）、六十一歳で引退し書院の経営を黄鵠に譲っており、日記を見ると、書画など美術品の鑑賞会に出かける機会がそれまでより増えていったように見うけられるが、南岳にとって東洋芸術の愛好はけっして老後の趣味といった興味本位のものではなかった。それは青年時代からの関心と探求にもとづくものであり、南岳の学芸の重要な一部をなしていたのである。

泊園文庫に収められる印章は印材、彫刻、印字、側款のいずれをとっても韻致秀逸なものであり、芸術品としてすぐれた価値をもっている。逆にいえば、篆刻者たちは南岳の鑑賞眼にたえるべく意匠をこらしたすぐれた印章を贈ったのに違いない。作者未詳の印章も多いが、これらもまた篆刻の名手によって作られたものといえよう。

実際、これらを手にとってみると、気韻の清雅さに心を動かされる。南岳のいう「抜萃之美可喜」（抜萃の美、喜ぶべし）の趣きが伝わってくるのである。そのことは『泊園文庫印譜集』巻頭の写真を見るだけでもわかっていただけるかと思う。本コレクションが日本近代の篆刻を代表する佳品群となっているのもうなづけるというものである。